琉球大学学術リポジトリ

全国学力・学習状況調査の沖縄県結果の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-11-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7790

全国学力・学習状況調査の沖縄県結果の検討

藤　原　幸　男*

A Study of Results of Okinawa Prefecture's Children and Students in National Academic Ability Test and National Learning Consciousness Report 2007

Yukio　FUJIWARA

はじめに

2007年4月24日に実施された全国学力・学習状況調査（児童は小学校6年生、生徒は中学校3年生を対象に実施）の結果が2007年10月25日の新聞紙上で発表された。沖縄県の結果は、全科目(小学校国語A、国語B、算数A、算数B、中学校国語A、国語B、数学A、数学B)の平均正答率がいずれも全国最下位であった。新聞では、「沖縄を除き地域差縮小」と書かれており、全国的には地域差縮小と言われる中でなぜ沖縄は群を抜いて最下位なのか、の素朴な疑問が残った。

沖縄県教育長は、この結果について「強い衝撃を受けている。厳粛に受け止め、県民総ぐるみの学力向上対策を強力に進めたい」と述べた。[1] その一方で、想定範囲内、予想通りと冷静に受け止める県民も一定程度いた。

その後、12月8日には、「沖縄の子どもたちに豊かな学力を――『学力テスト』・『学力問題』を問う――」をテーマにした教育シンポジウムが沖教組那覇支部を中心に開かれ、この問題に対して県民レベルで活発な議論がなされた。[2] 県内地元紙（「沖縄タイムス」「琉球新報」）では、学力についての連載あるいは特集記事を掲載し、県内各層の意見を集約するとともに、今後の課題について追求を続けている。[3]

本稿では、全国学力・学習状況調査の沖縄県結果を検討する。なお検討資料は平成19年度全国学力・学習状況調査「調査結果概況」、「設問別調査結果」、「回答結果集計(児童質問紙)」、「回答結果集計（生徒質問紙）」を中心とし、「各問題の分析結果と課題」、「平成19年度全国学力・学習状況調査、小学校児童質問紙及び学校質問紙調査結果」、「平成19年度全国学力・学習状況調査、中学校生徒質問紙及び学校質問紙調査結果」を参考にした。

1．全国学力調査の全般的結果

（1）平均正答率

沖縄県結果の平均正答率(公立)を全国平均正答率(公立)と比べると、小学校国語、中学校国語、小学校算数はA問題が－5.0%～－7.3%、B問題(活用)が－8.0%～－9.3%の範囲なのに対して、中学校数学はA問題(知識)が－14.7%、B問題（活用）が－13.0%とダントツ

*琉球大学教育学部(教育学教室)

に低い。あまりにも酷い状況である。(表１、表2、表3、表4)

46位との差をみると、中学校国語Bは－0.0%、小学校算数Aは－0.5%とほとんど差がないのに対して、他は、－2,7%から－5.6%の範囲にある。ここから、学年・教科によっては、46位とさほど差がない教科もあること、沖縄県と同様にかなり低い状況にある道府県もあることがわかる。ちなみに沖縄県とさほど差がない教科の46位をみると、中学校国語Bは高知県、小学校算数Aは北海道である。いずれも経済的基盤の弱い道県であり、経済格差の点からの検討の必要性を示唆している。小学校国語A・Bの46位は大阪府、小学校国語A・B、算数A・Bの46位は北海道であり、中学校国語A・B、中学校数学A・Bの46位は高知県であり、特定の道府県に集中していることがわかる。

表１　平均正答率（小学校国語）

	A（知識）	B（活用）
沖縄	76.7%	53.0%
全国	81.7%（－5.0）	62.0%（－9.0）
46位	79.4%（－2.7）	58.0%（－5.0）

表２　平均正答率（中学校国語）

	A（知識）	B（活用）
沖縄	74.3%	64.0%
全国	81.6%（－7.3）	72.0%（－8.0）
46位	78.1%（－3.8）	64.0%（－0.0）

表３　平均正答率（小学校算数）

	A（知識）	B（活用）
沖縄	76.3%	54.3%
全国	82.1%（－5.8）	63.6%（－9.3）
46位	76.8%（－0.5）	58.6%（－4.3）

表４　平均正答率（中学校数学）

	A（知識）	B（活用）
沖縄	57.2%	47.6%
全国	71.9%（－14.7）	60.6%（－13.0）
46位	62.8%（－5.6）	50.6%（－3.0）

（２）正答数分布

正答数分布は、大きくみると、３つに類型化できる。１つには、下位は差がないが、中位が多く上位が少ないタイプ（Aタイプ）である。小学校国語A、算数A、中学校国語A、国語Bがあてはまる。下位の児童・生徒数は全国との差はほとんどない又はあまりないが、上位の児童・生徒数には大きな差が認められ、人数が少ない。正答数分布の山は上位のほうにある。（図１）

２つには、正規分布だが、正答数の分布の山が低得点の方にずれ込み、上位が少ないタイプ（Bタイプ）である。具体的には、小学校国語B、算数Bであり、これらは全国平均と比べて正答数の分布の山が下方にずれ込み、上位の児童数の人数が少なくなっている。正答数分布の山は全国平均が高得点の方にあるのに比べて、真ん中近くに山がある。（図２）

3つには、高得点と低得点の間になだらかな低い山が見られ、しかも山の頂上が全国平均よりかなり低得点の方にあるタイプ（Cタイプ）である。具体的には、中学校数学A、

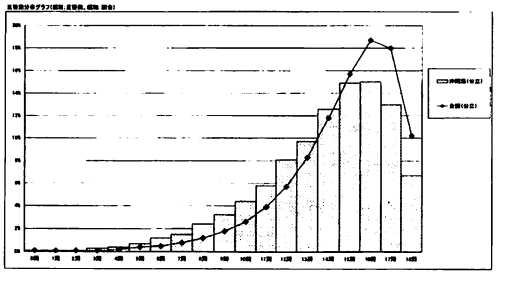

図１　正答数分布のＡタイプ(小学校国語Ａ)

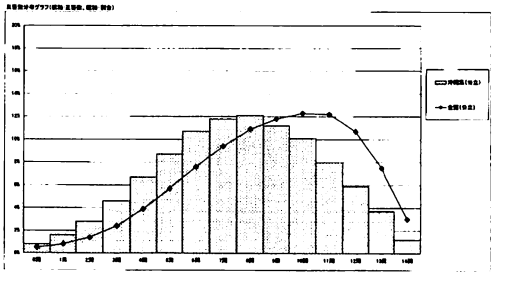

図２　正答数分布のＢタイプ(小学校算数Ｂ)

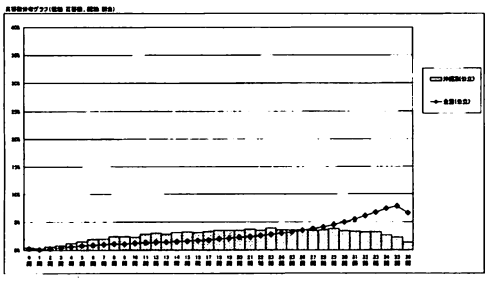

図３　正答数分布のＣタイプ(中学校数学Ａ)

数学Bである。数学A,数学Bとも全国的にも山が低いのだが、数学Aは全国平均が高得点に行くにつれてしだいに山が大きくなり、低いなりに満点に近いほうに山があるのに対して、沖縄県は終始なだらかな低い山で、どこが頂点かわからないほど平坦である。数学Bはこの傾向が著しく、真ん中より低得点の方に頂点がある。数学Aは中位の子もぽつぽついるが、数学Bは下位に集まっていて、それより上の子は少ないことが特徴的である。(図３)

２．教科別の個別分析（１）――国語――

難波博孝は、「国語」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の4領域に沿った設問になっているが、「読む力」がないとすべての設問は解けないし、「『読むこと』領域以外の意図で出された設問であっても、結果的には『読むこと』の力を測っている設問が数多く出されて」いて、「今回の調査は、文部科学省の意図とは別にして、大規模な『読むことに関わる知識・技能の活用』を調査したものと考えることができる」と述べている。[4]

（１）小学校国語

①国語A

沖縄県児童の平均正答率が全国平均より7点以上低いのは、「漢字字典の効率よい調べ方」(－7.9%)、「一文を二文に分けて書く」(－8.7%)、「べっこうあめ作りの感想を、作り方の説明書にする」（－7.2%）、「説明文の一部を読んで、内容に合うものを選択する」(－7.1%)という設問である。

「漢字の読み書き」については、「先生にそうだん（相談）する」「魚をやく（焼く）」が50%台以外は90%以上の平均正答率である。「魚を焼く」経験がない、先生に相談することは少なく相談という漢字を意識しないなどに起因し、生活に密着した言葉の「書き」の力が弱い、ということなのであろう。

「文を構成する」については、「同じ主語の一続きの文を同じ主語の二文に分ける」ことを要求している。全国的にも高くない(57.8%）が、沖縄県も49.1%と低い。

「インタビューのメモを取る」は、「インタビューの聞き取った内容をメモに取るときに大切なこと」として「要点を簡潔に」「見出しを付けて箇条書きに」などを知っていて、それと照合して選択肢を選ぶことを要求しているが、47.5%と低い。「スピーチする」は「聞き手に分かりやすい話し方」を問うものであるが、54.0%と低い。いずれも「知識」を問うものである。「インタビュー」「スピーチ」についての知識が指導されていないのだろう。

「説明を書く」「段落の内容を把握する」は、「感想」と「作り方」の照合、段落の「文章の中の語句」と「選択肢の語句」の照合を要求するものである。正答率は比較的高いが、全国平均とは７%以上低い。

「登場人物を把握する」は、元の文章の視点とは異なる視点から書かれた選択肢から正答を選ばせる設問であり、視点の転換を行って読み取ることが必要である。全国的にも低い（63.1%）が、沖縄県も59.3%と低い。

②国語B

平均正答率が全国平均より10点以上低いのは、「古紙を回収に出すときに守ることを新聞に書く」(－11.2%)、「同じ本を読んで書いた二人の感想文から、共通する書き方のよいところを書く」（－11.3%、－11.2%)、「広告の情報を読み取って、正しい内容を選択する」(－13.7%)、「客に対する勧誘の表現を適切に改めて書く」(－13.9%)の設問である。

「話し合いにおける司会」についての設問は、文章を読んで欠けている記述を指摘するもので、司会の文章との照合が求められている。そういう意味では「読むこと」の「解釈」(文章をまとめる)が問われている。全国的にも62.9％と高くないが、沖縄県も54.7％と低い。「司会者のよいところ」の設問は司会者のあるべき姿についての知識がなければ答えられないのだが、沖縄県はこの点も72.0％とやや低い。

「新聞の記事を書く」は、二は文章の「情報の取り出し」であり、前後の文を読み、2つにまとめればよく、難しくないはずだが、長い文章のために諦めたのか、探し出せずにいる。全国的にも45.4％と低いが、沖縄県も37.8％と低い。三は元の文章から該当箇所を見つけて要約メモの形で書き換える設問であり、「情報の取り出し」と「書くこと」を求める設問である。全国的にも49.0％と低いが、沖縄県も37.8％と低い。また、無解答率も全国平均11.5％、沖縄県19.1％と高い。

「比べて読む」は、「読むこと」というよりは、「良い感想文」についての知識を問う設問であり、「良い感想文」についての知識がなければ答えられない。全国的にも55.9％、54.9％と低いが、沖縄県も44.6％、43.7％と低い。また、知識がなければ答えられないためか、無解答率も、全国平均13.2％、17.5％と低いが、沖縄県は24.0％、29.0％と全国平均の2倍近くである。

「情報を読み取る」は、広告の中の文章や語句を正しく取り出す設問であり、生活場面での適用を求めている。この意味では「生活の中での文章の情報の読み取り」だが、平均正答率は全国平均62.8％、沖縄県49.1％と低い。また無解答率も全国平均が6.7％なのに対して、沖縄県は12.4％と2倍近くである。「みなさん、おいで」を敬語に言い換える問題は、特に沖縄県では敬語の文化がないので低くなっている。全国平均77.0％、沖縄県63.1％である。無解答率は全国平均9.4％にたいして、沖縄県17.8％と2倍近く低い。

③小学校の結果から見えること

難波博孝は、（1）生きた（生活場面での）文章の「情報の取り出し」が苦手である、（2）条件に合わせて書いたり書き換えたりすることが苦手である、（3）熟考・評価などの記述問題の無解答率が依然として高いと指摘している[5]。全国的な傾向であるが、沖縄県の子どもにも言える。これらの点でかなりの差が出ている。

さらに言えば、沖縄県の場合、よいインタビュー・よいスピーチ・よいメモの取り方・よい感想文などの知識がきちんと教えられていないためか、これらについて理解していないし、技能として定着していない。

（2）中学校国語

①国語A

平均正答率が全国平均より9％以上低いのは、「手紙の主文の書き出しの語を選択する」（－17.％）、「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す」（－9.8％）、「漢字を書く」（－13.7％、－15.9％、－18.6％）、「漢字を読む」（－17.5％、－20.5％、－12.8％）、「適切な敬語を選択する(謙譲語)」（－11.0％）である。

「手紙を書く」については、中学生の日常において手紙を書くという生活が消失し、ほとんどの中学生がケータイで済ませていること、ケータイ語でやりとりしていることを考えると、中学生の実生活からあまりにも離れていて、国語の基礎として「拝啓－敬具」、「終わりの形式」を解答させるのには疑問をもつ。難波が言うように、「『書くこと』に関する設問が『手紙文の書き方』に偏っていることには疑問が残る」といえる。

「文学的文章を読む」という設問は、表現内容と表現方法に関するものである。「消し飛ぶ」の様子表現を聞く設問は全国平均正答率70.0％に対して、沖縄県の平均正答率は66.0％である。この文章に描かれた場面と表現を聞く設問は、「比喩」「色彩」「音」「感触」といった「語句」で文章を表現することを求めているが、「比喩」「色彩」「音」「感触」に注目して文章を検討することに慣れていない

せいか、全国平均正答率が71.6％と低いのと同じく、沖縄県の平均正答率も66.4％と低い。難波が言うように、「『比喩』『色彩』といった『抽象レベルの語句』で文章を分析・評価することが苦手のようである」。

「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す」という問題は、「文語文についての知識を問う『言語事項』の設問」であり、この点については、全国平均正答率が「かをる」（91.8％）、「ふるふ」（62.6％）なのに対して、沖縄県の平均正答率は「かをる」（88.1％）、「ふるふ」（62.6％）で、全国とほぼ同じである。

「インタビューする」という設問のうち、インタビュー項目の適否を問う設問は、問いの文を読めば答えられる設問である。「インタビューの改善すべきところ」の設問は、どのようなインタビューがよいのかという知識がないと解けない設問であり、この点で全国平均正答率が80.5％なのに対して、沖縄県は73.7％と低くなっている。この点の弱さは小学校国語と共通する。

「グラフをもとに考える」という設問はPISAを意識して作成された設問であるが、全国平均正答率72.4％と低いが、沖縄県の正答率も67.6％と低い。グラフを文章にして説明する力が弱い。

「漢字を書く」の設問だが、「会社のリエキをあげる」「おもしろみがハンゲンした」「友達に本をカす」は全国平均正答率68.2％、66.3％、58.1％に対して、沖縄県の平均正答率は54.5％、50.0％、39.5％であり、－13.7％、－15.9％、－18.6％と著しく低い。「漢字を読む」の設問だが、「道路を拡張する」「草木が繁茂している」「入会を勧める」は全国平均正答率83.0％、30.3％、66.2％に対して、65.5％、9.8％、53.4％であり、－17.5％、－20.5％、－12.8％とこれも著しく低い。この原因はどこにあるのだろうか。

このほか全国の平均正答率と比べて低いのは、代表的な古典に親しんでいるという趣旨で出題された「枕草子の冒頭を書く」で、全国平均正答率88.0％に対して沖縄県の平均正答率は72.9％であり、その差は－15.1％である。「適切な敬語を選択する（謙譲語）」で、全国平均正答率89.4％に対して沖縄県の平均正答率は78.4％で、その差は－11.0％と著しく低い。

無解答率が高いのは、「グラフから情報を読み取り、文章の結論につながるように書く」(13.5％)、「枕草子の冒頭を書く」（13.4％）である。あとは「漢字を書く」で、「会社のリエキをあげる」(25.0％)、「おもしろみがハンゲンした」（28.0％)、「友達に本をカす」(14.5％)、「漢字を読む」で、「道路を拡張する」(11.6％)、「草木が繁茂している」（45.3％）で、全国平均無解答率の2倍ある。この原因はどこにあるのか、探る必要があるだろう。

②国語B

平均正答率が全国平均より10％以上低いのは、「広告カードについての会話文とカードの内容から、書いた人を特定する」（－11.9％)、「中学生が作成した広告カードに共通して書かれている情報を二つ書く」（－10.0％、－11.8％）である。

「『蜘蛛の糸』の一部分を朗読する場合の適切な工夫を選択する」という設問は、「作品の展開や心情の変化に着目して朗読する」で全国平均正答率68.5％に対して沖縄県の平均正答率59.9％、「「三」の場面の有無に関して自分の考えを指定字数内で書く」という設問は、「作品の内容や構成、表現上の特色を踏まえて、自分の考えを書く」で全国平均正答率74.8％に対して沖縄県の平均正答率は65.7％と低い。「解釈」と「熟考・評価」を要する問題で、このような問題が苦手であるといえる。「「三」の場面の有無に関して自分の考えを指定字数内で書く」という設問は、条件にしたがって書けばよいのであって、内容の論理性を問わないので、難しくないのだが、「蜘蛛の糸」の文章が長文のせいか、無解答率が10.1％と高い。

「広告カード」の問題は、PISAを意識して作成されており、「複数の資料を比較しなが

ら読む」問題である。「コピー」「強烈な一文」という内容が示す部分を広告カードから正しく取り出すことが問われているのだが、全国平均正答率73.1%に対して沖縄県の平均正答率は63.2%で、文章を「抽象的な言葉」で解釈して説明する力が弱い。「広告カードを比較して、共通して書かれている情報を読み取る」についても同じで、全国平均正答率73.2%、53.9%に対して沖縄県の平均正答率は63.2%、42.1%で低く、同上の力が弱いといえる。ただし、本の紹介の要件についての知識がある程度必要で、それが不足しているとも考えられる。「3人の中学生の広告カードと店長の広告カードを比較してちがいを説明する」問題も同じで、全国平均正答率は42.6%と低いが、沖縄県の平均正答率も35.2%と低い。

無解答率が9%を超えるのは、「ロボットと共存する未来社会について想像し、自分の考えを書く」(9.6%)、「『蜘蛛の糸』の『三』の場面の有無に関して、自分の考えを80字から120字以内で書く」(10.1%)、「中学生が作成した広告カードに共通している情報を二つ書く」(6.8%、10.0%)、「中学生の広告カードと、店長が作成した広告カードを比較し、違いを説明する」(12.4%)の設問である。「自分の考えを書く」とか、「情報を分析して、共通点、ちがいを書く」ことに手がつかない中学生がいることを示している。

③中学校の結果から見えること

難波博孝は、(1)抽象的な概念を使って文章を読んだり説明したりすることが苦手である、(2)生きた(生活で使う)文章の「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」が苦手である、(3)グラフを文章で説明することが苦手であることを指摘し、これらを中学生の課題であるとしている[6]。全国的な傾向であるが、沖縄県の子どもにも言える。これらの点でかなりの差が出ている。

3. 教科別の個別分析(3)——算数・数学——

(1)小学校

①算数A

沖縄県の平均正答率が全国平均正答率より8%以上低いのは、「12÷0.6」(−18.4%)、「0.5、7/10、4/5のうち最大の数を、数直線上に表す」(−8.2%)、「半径10cmの円の面積を求める式と答えを書く」(−13.4%)、「16cmのひもで縦の長さが3cmの長方形を作ったときの横の長さを求める」(−9.9%)、「16cmのひもで長方形を作ったときの縦と横の関係の長さをあらわした表を完成させる」(−15.2%)、「16cmのひもで作った長方形の縦の長さが1cm増えるときの長さの変化を答える」(−14.4%)である。

沖縄県の平均正答率が61%以下なのは、「12÷0.6」(54.3%)、「210×0.6の式で答えが求められる問題を選ぶ」(57.4%)、「半径10cmの円の面積を求める式と答えを書く」(59.6%)、「16cmのひもで長方形を作ったときの縦と横の関係の長さをあらわした表を完成させる」(60.1%)、「16cmのひもで作った長方形の縦の長さが1cm増えるときの長さの変化を答える」(60.7%)である。

算数Aは基礎・基本の問題で、たとえば「半径10cmの円の面積を求める式と答えを書く」は基礎の中の基礎であり、その得点が低く、全国平均正答率と比べて差が大きい(−13.4%)のはなぜなのか、を検討する必要がある。

全体的に難しくなく、何らかの形で解答できる問題であるせいか、無解答率はいずれも低く、0.1〜2.5%のあいだにある。

②算数B

沖縄県の平均正答率が全国平均正答率より10%以上低いのは、「長方形のまわりの長さを求める式を選ぶ」(−10.5%)、「全体の長方形から内部の長方形をのぞいた残りの部分の面積が等しいことの理由を説明する」(−11.4%)、「木曜日と日曜日に安売りをするケーキ屋で指定されたケーキを買うとき、どちらの曜日がいくら安くなるかを求める式と答え

を書く」（－14.7%）、「5個のケーキを買うとき、与えられた条件から残り2個のケーキの買い方を答える」（－11.4%）、「2地点間を往復する際、行きに通った道を通らず、行きと同じ道のりとなる帰りの経路を書く」（－10.9%）、「式を用いて計算した走り高跳びのめあてと実際の記録を比べ、正しい記述を選ぶ」（－10.3%）、「2人の走り高跳びのめあてについて、計算せずに代償を比較できる理由を説明する」（－16.7%）である。

沖縄県の平均正答率が61％以下なのは、「長方形のまわりの長さを求める式を選ぶ」(56.7%)、「全体の長方形から内部の長方形を除いた残りの部分の面積が等しいことを説明する」(56.5%)、「25×32を、筆算を用いずに工夫して計算する方法を説明する」(51.6%)、「漁業に携わる人数のグループ別の割合を表した帯グラフを見て、正しい記述を選ぶ」(46.7%)、「木曜日と日曜日に安売りをするケーキ屋で指定されたケーキを買うとき、どちらの曜日がいくら安くなるかを求める式と答えを書く」(14.5%)、「5個のケーキを買うとき、与えられた条件から残り2個のケーキの買い方を答える」(47.7%)、「2地点間を往復する際、行きに通った道を通らず、行きと同じ道のりとなる帰りの経路を書く」(60.3%)、「式を用いて計算した走り高跳びのめあてと実際の記録を比べ、正しい記述を選ぶ」(54.6%)、「2人の走り高跳びのめあてについて、計算せずに大小を比較できる理由を説明する」(34.5%) である。

無解答率が10％を超えているのは、「全体の長方形から内部の長方形をのぞいた残りの部分の面積が等しいことの理由を説明する」(15.5%)、「25×32を、筆算を用いずに工夫して計算する方法を説明する」(14.5%)、「木曜日と日曜日に安売りをするケーキ屋で指定されたケーキを買うとき、どちらの曜日がいくら安くなるかを求める式と答えを書く」(15.4%)、「5個のケーキを買うとき、与えられた条件から残り2個のケーキの買い方を答える」(14.8%)、「2地点間を往復する際、行きに通った道を通らず、行きと同じ道のりとなる帰りの経路を書く」(13.0%)、「式を用いて計算した走り高跳びのめあてと実際の記録を比べ、正しい記述を選ぶ」(18.1%)、「2人の走り高跳びのめあてについて、計算せずに大小を比較できる理由を説明する」(36.8%) である。14問中7問で、半数が無解答率10%を超えていることになる。この数字は大きい。

算数Bは、「活用」を中心としていて、「日本の漁業に携わる人の数」を示した棒グラフ、「漁業に携わる人の数のグループ別の割合」を示したグラフから情報を読み取る設問、「ケーキ屋から一定条件の下でケーキを買う」設問、「買い物の経路」の設問など、PISAを意識して、日常場面から借りて状況設定した設問が多く出題されている。このような設問に不慣れなためか、平均正答率は低くなっているし、無解答率も高くなっている。

（2）中学校

①数学A

中学校数学Aは基礎基本の知識・技能を習得しているかを見る問題で、中学2年までの全学習領域を問うているが、全国平均正答率と比べて10%以上差がある設問が沖縄県の場合は36問中27問で、実に75.0%に及んでいる。20%以上差がある設問は36問中7問で、19.4%である。10%以内は、「一次方程式を解くとき、移項の意味を選ぶ」「線対称な図形の対称軸を選ぶ」「長方形を１回転させできる立体を選ぶ」など、基礎中の基礎に限られている。この程度しかできていないことは中学校数学の基礎学力の未形成を意味し、事態は深刻である。

まず、小学校6年で学習する分数の除法の問題は、約分を必要としない出題形式で、できて当然だが、平均正答率は67.5%で、約３分の１は解けていない。しかも無解答率が全国平均7.0％に対して16.4%もあるのは問題である。「8－5×(－6)」は、小学校において、正の数の範囲で乗除先行(優先)にもとづいて計算していたことを思い起こせば解けるのだ

が、平均正答率は56.9%で、全国平均正答率77.1%と比べると20.2%の差がある。

中学校に入ってまず習う数と式（文字式、方程式）についても、34.2%～67.4%の平均正答率で、「一次方程式を解くとき、移項の意味を選ぶ」以外は、全国平均正答率と比べて15.7%～26.0%の差がある。

「図形」については、他と比べて、全国平均正答率との差は大きくないが、正答率の低い設問から、「空間での平面と直線の位置関係（面と辺と垂直、ねじれ）について理解していない」ことが読み取れる。

数量関係（「比例」「関数」「確率」）については、全国平均正答率も低いが、沖縄県の平均正答率は全国との差が大きくなっている。沖縄県の平均正答率の低さから、「比例の意味は知っているが、グラフから比例の式を求めることが不十分である」「反比例の関係を示すグラフの特徴を理解していない」「一次関数の意味を理解していない」「確率の意味を理解していない」ことが読み取れる。

②数学B

中学校数学Bは知識・技能の活用を見る問題で、全国平均正答率と比べて10%以上差がある設問が沖縄県の場合は17問中11問で、実に64.7%に及んでいる。20%以上差がある設問は17問中2問で、11.8%である。全国平均正答率も60.6%と低いので、A問題以上の差は出なかったものと思われる。また、正答数分布グラフの山の頂上が全国平均では15問に対して、沖縄県は6問になっているのは差の大きさを示すものである。

ただし、全国の無解答率は14.4%に対して沖縄県の無解答率は22.4%で、8.0%の差がある。無解答率が40%以上の設問が17問中6問あり、全問のうち35.3%にも達する。無解答率40%以上の設問の無解答率の平均は48.5%（全国31.6%）である。考える手がかりがなかったのか、あるいはこのような問題に遭遇したことがないので手も足も出なかったということなのか、検討を進める必要がある。

数学Bは、PISAを意識して、日常生活に題材を求めて状況設定し、「情報の適切な選択と判断(セットメニュー)」、「説明を振り返り、発展的に考えること(連続する自然数の和)」、「問題解決の構想と結果の振り返り（サッカー大会)」、「証明の評価・改善(垂直二等分線の性質の証明)」、「事象の数学的解釈と問題解決の方法(水温の変化)」、「事象の数学的解釈と判断（図書館への往復)」といった構成になっている。

設問は、「アからオの中から1つ選びなさい」の形式の他に、「選んだ理由を説明しなさい」、「QチームとRチームが同点で1位になることを説明しなさい」、「正しく書き直しなさい」、「その特徴を説明しなさい」、「浩志さんの考えた方法のほかに、どんな方法が考えられますか。その方法を説明しなさい。」、「選んだ理由を説明しなさい」といった形式で、解釈する力や表現する力を求めている。全国と同様に沖縄県の子どもも、「知識を活用する力」、「日常生活の問題を数学化する力」、「条件を把握する力」などに課題を残している。

4．児童・生徒への質問紙調査の結果

全国学力・学習状況調査は、学力調査とは別に、質問紙調査によって学習状況を調査している。児童・生徒に各99の質問に回答を求めている。その内容は生活習慣、自己意識、学習習慣、地域・世の中の出来事への興味・関心、道徳的きまりについての意識、自然との触れあい、スポーツへの関心、総合的な学習の時間の評価、国語の授業と勉強、算数・数学の授業と勉強、学力検査の解答時間・調査問題など、多方面に渡っている。あまりのも多岐に渡っているために、回答が直感的になってしまったのではないかと危惧する。

児童・生徒への質問紙調査は悉皆調査である。そのために、どのように答えるとよいかを想定しながら回答した可能性も否定できない。データをみると、児童・生徒の回答の中には望ましいと期待される回答＝「良い子」的な回答も予想以上に見受けられ、沖縄県の

子どもの回答も全国平均に類似している印象を受ける。

尾木直樹は、「全数調査は、…高い得点を目標とする学力テストのような調査では、他県、他市、他校に負けまいと、少しでも高得点を目指して『努力』し『競争』することで結果に影響がでるため適しません。今回(2007年度)の全国一斉学力テストの結果(2007年10月発表)をみても、この特徴がうかがえます。児童・生徒への質問紙調査や校長への学校質問紙調査では、以前の『教育課程実施状況調査』と比較しても、あまりにも良い数値が出ています。」[7] と述べているが、たしかにそのように見てよい回答結果もいくつかある。

質問紙による回答結果だけでは、正直に回答している設問と、望ましい答えを回答しているものとの区別の判断が難しい。他の類似の調査と照合して、そして直に学校現場で児童・生徒と接している小・中学校教員の評価を加味してその妥当性を判断せざるを得ないところに、難しさがあるといえる。やや割り引いて評価するのが適切なのかもしれない。以下、特徴のある項目について述べることにする。

（1）生活習慣について

「朝食を毎日食べているか」については、「毎日食べている」が児童81.8%(全国86.3)、生徒76.4%(全国80.5%)とやや少なくなっている。しかし、別の調査では、5割と少なくなっているので、このままとらえるのは適切ではないであろう。[8]

「学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめているか」は、児童61.7%(全国64.0%)、生徒55.3%（全国65.1%）となっていて、生徒のほうがかなり低い。

「毎日、同じぐらいの時刻に寝ているか」は児童33.6%（全国36.9%）、生徒32.6%(全国28.8%)、「毎日、同じぐらいの時刻に起きているか」は児童53.2%(全国58.7%)、生徒58.4%（全国55.0%）である。「普段(月～金曜日)、何時ごろに起きるか」は、「午前6時30分～7時30分」が児童69.2%（全国62.0%）、生徒67.4%(全国58.5%)と、多くなっている。

「普段（月～金曜日）、何時ごろに寝ますか」は、「午後11時以降、午前0時前」が児童18.9%(全国14.1%)、生徒16.4%(全国21.2%)、「午前0時以降」は児童4.5%（全国3.4%）、生徒22.7%（全国30.1%）となっている。沖縄は深夜徘徊が指摘されている。児童についてはほぼ妥当だといえるが、生徒については、このまま受け取ってよいかどうか、他の調査と照らして判断する必要がある。

「テレビを見る時間やゲームをする時間などのルールを家の人と決めているか」については、「している」が児童21.4%(全国28.1%)、生徒8.2%(全国9.7%)となっていて、全国と比べてやや少なくなっている。この質問は「家の人と」決めているとなっていて、沖縄には「家の人と決める」習慣があるか、を見なければならない。また、中学生になると、「家の人と決める」ことは極めて少なくなっていることを考えると、この設問は妥当なのか、疑問である。むしろ、「自分で」決めているか、にした方が良かったように思われる。

「普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・ＤＶＤをみたり聞いたりするか」は、「1時間以内」が児童16.0%(全国15.0%)、生徒17.3%（全国13.5%）、「4時間以上」が児童14.4%(全国16.9%)、生徒12.1%(全国15.7%)である。「普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲームやインターネットをするか」は、「全くしない」は児童29.1%(全国16.3%)、生徒36.3%(全国21.9%)である。児童・生徒の回答を見る限り、テレビやビデオ・ＤＶＤ、テレビゲームやインターネットを見たり行っている児童・生徒は少ないといえる。

「携帯電話で電話やメールをしているか」は、「携帯電話を持っていない」が児童77.3%（全国72.0%）、生徒48.9%（全国40.7%）で、全国と比べて少ないといえる。

（2）家族コミュニケーションについて

「家の人と普段(月～金曜日)、朝食を一緒

に食べているか」は沖縄は全国とあまり変わらないが、「家の人と普段(月～金曜日)、夕食を一緒に食べているか」は、「あまりしていない」「全くしていない」を合わせると児童14.1%(全国12.2%)、生徒28.8%(全国19.7%)である。とくに生徒のほうが全国より1.5倍程度多くなっている。

「家の人と学校での出来事について話をするか」は、「あまりしていない」と「全くしていない」を合わせて児童36.9%(全国31.5%)、生徒47.0%（全国42.0%）と、児童よりも生徒のほうが話をしておらず、全国と比較しても少なくなっている。

（3）自己意識について

これに関して、「自分には、よいところがあると思いますか」という設問が興味深い。沖縄は「どちらかといえば」を含めて「当てはまらない」という回答が、児童33.7%（全国28.5%）、生徒46.1%（全国39.3%）とずいぶん多い。よいところがないと自信をもっていないことを示しており、このことは検討を要する。

「将来の夢や目標を持っているか」は、「当てはまる」が児童68.7%(全国66.6%)、生徒45.3%（全国44.4%）で、全国との差はほとんどないが、児童よりも生徒に成長するにつれて「夢や目標」が少なくなってきていることに注目したい。

（4）学校外での学習について

「学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強するか」は、「30分より少ない」は児童8.4%(全国12.0%)、生徒13.8%(全国10.2)、「全くしない」は児童2.8%(全国4.1%)、生徒12.4%(全国8.4%)と、児童と生徒とでは逆になっていて、沖縄では生徒のほうが勉強しなくなってきている。

「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強するか」は、「1時間より少ない」は児童32.6%（全国35.9%）、生徒29.6%（全国22.5%）、「まったくしない」は児童6.6%（全国10.9%）、生徒23.6%(全国15.2%)である。これも先と同じ傾向にあり、沖縄では生徒のほうが勉強しなくなってきている。

「学習塾（家庭教師）で勉強をしているか」は、「学習塾に通っていない」は児童64.2%（全国55.1%）、生徒52.6%(全国40.2%)で、全国に比べて「学習塾に通っていない」児童・生徒が多い。沖縄は貧困家庭が多く経済的に余裕がない、学習塾は都市近郊に集中していることがその理由として考えられる。

「家で学校の宿題をしているか」は、「している」と「どちらかといえば、している」を合わせると、児童91.1%（全国94.7%）、生徒66.1%（全国80.2%）となっていて、全国と比べて沖縄は、「家で学校の宿題をしている」児童はやや少なく、生徒はかなり少ないといえる。

「家で学校の授業の予習をしているか」は、「している」と「どちらかといえば、している」を合わせると、児童42.4%(全国32.9%)、生徒24.5%（全国29.5%）であり、全国と比べて児童は上回っている、生徒は下回っている。「復習」については、児童63.1%(全国40.1%)、生徒45.5%（全国44.2%）である。沖縄県の児童・生徒は、予習よりも復習を重視しているといえる。

「家で自分の興味のあることについて調べたり、勉強したりしているか」は、「している」と「どちらかといえば、している」を合わせると、児童44.1%(全国50.3%)、生徒39.7%（全国44.5%）である。主体的学習についてたずねている質問である。全体的に数値が良すぎるので信憑性が問われるが、それでも沖縄県は全国と比べて下回っている。

（5）学校の授業について

①国語の授業について

「国語の勉強は好きか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童56.5%（全国59.6%）、生徒53.9%（全国56.8%）であり、全国と比べるとやや少ない。「国語の勉強は大切と思うか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童91.2%（全国

91.1%)、生徒89.2%（全国89.9%）で、圧倒的に高く、しかも全国との差がない。これに対して、「国語の授業の内容はよくわかるか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童73.0%（全国78.0%)、生徒61.6%（全国65.4）で、全国と比べて少し差が出ている。

「新しく習った漢字を実際の生活で使おうとしているか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童69.8%（全国73.0%)、生徒50.1%（全国58.1%）で全国と比べると差があり、とくに生徒においてその差が大きい。

「相手や場面に応じた言葉遣いに気を付けているか」は、児童75.7%（全国79.6%)、生徒80.2%（全国84.5%）で、全体的に数値が良すぎるので信憑性が問われるが、全国と比べると少し差がある。

児童だけを対象にした質問だが、「国語の授業で資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしているか」は、「している」と「どちらかといえば、している」を合わせると。児童53.6%（全国59.0%）で、全国と比べると差がある。「国衙の授業で、２つ以上の資料や文章を比べて読んだり、調べているか」は、「している」と「どちらかといえば、している」を合わせると。児童39.5%(全国43.2%)で、全国と比べるとやや差がある。

生徒だけを対象にした質問だが、「国語の授業では、自分の思いや考えを書くことが多いか」は、「多い」と「どちらかといえば、多い」を合わせると、生徒65.8%（全国64.4%）で、全国と比べて差はない。「国語の授業では、友達と話し合ったりして意見を交換する場面が多いか」は、「多い」と「どちらかといえば、多い」を合わせると、生徒39.9%（全国39.5%）で、全国と比べるとこれも差がない。しかし、「解答を文章で書く問題は、最後まで解答を書こうと努力したか」は、「途中であきらめたものがあった」と「書く問題は全く解答しなかった」を合わせると、生徒32.7%（全国26.3%）で、全国と比べると差が出ている。

②算数・数学の授業について

「算数・数学の勉強は好きか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童68.0%（全国65.0%)、生徒53.0%（全国51.0%）である。とくに生徒において、中学校数学Ａ・Ｂで平均正答率が著しく低かったことを考えると、信憑性に欠ける。望ましいと期待される答えを書いたのかどうかを、インタビュー調査などで検証する必要がある。「算数・数学の勉強は大切だと思うか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童93.0%(全国92.5%)、生徒78.9%(全国78.8%)である。

これに対して、「算数・数学の授業の内容はよく分かるか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童75.3%(全国77.1%)、生徒60.6%(全国63.6)である。これも、中学校数学Ａ・Ｂであれほど低い平均正答率であったことを考えると、信憑性に欠ける。これについても、望ましいと期待される答えを書いたのかどうかを、インタビュー調査などで検証する必要がある。

「算数・数学の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えるか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童74.3%(全国74.7%)、生徒63.5%(全国63.0%)である。中学校数学Ａ・Ｂであれほど低い平均正答率であったこと、無解答率がきわめて高かったことを考えると、明らかに信憑性に欠ける。望ましい答えを書いたのかどうかを、インタビュー調査などで検証する必要がある。

「算数・数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えるか」は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、児童61.1%(全国62.3%)、生徒33.4%(全国30.7%)である。児童よりも生徒のほうが低くなっている。また、全国と比べると、中学校数学Ａ・Ｂであれほど低い平均正答率であったことを考えると、信

憑性がないとまではいえないが、疑問は残る。望ましいと期待される答えを書いたのかどうかを、インタビュー調査などで検証する必要がある。

（5）学力調査の問題について

①国語

「解答時間は十分だったか」について、小学校国語Aは「時間が余った」が児童45.7%（全国59.1%)、「やや足りなかった」は16.9%（全国10.4%)、「全く足りなかった」は児童4.3%(全国2.2%)であった。小学校国語Bは、「時間が余った」は児童27.6%（全国39.1%)、「やや足りなかった」は児童29.2%（全国23.0%)、「全く足りなかった」は児童12.7%(全国7.0%)であった。中学校国語Aは「時間が余った」は生徒55.1%（全国72.4%)、「やや足りなかった」は6.2%（全国2.7%)、「全く足りなかった」は児童2.0%(全国1.0%)である。中学校国語Bは、「時間が余った」は生徒43.1%（全国55.6%)、「やや足りなかった」は15.1%(全国11.0%)、「全く足りなかった」は生徒3.7%（全国2.1%）である。全国と比べての得点の低さを裏づけているといえる。

どの問題でも「時間が余った」とする児童・生徒は全国よりも2割少ない、「やや時間が足りなかった」とする児童・生徒は、全国と比較すると、児童で1.3～1.6倍、生徒で1.4倍～2.3倍多い。「時間が全く足りなかった」は、全国と比較すると、児童で1.8～2.0倍、生徒で1.8倍～2.0倍多い。

「調査問題は簡単だったか」について、小学校国語Aは、「簡単だった」は児童37.6%(全国46.7%)、「どちらかといえば難しかった」は児童18.7%（全国13.5%)、「難しかった」は児童8.0%（全国5.3%）であり、小学校国語Bは、「簡単だった」は児童7.7%(全国10.0%)、「どちらかといえば難しかった」は児童41.1%(全国40.4%)、「難しかった」は児童30.0%(全国24.6%)であった。中学校国語Aは、「簡単だった」は生徒24.9%（全国39.8%)、「どちらかといえば、難しかった」は生徒21.7%（全国12.0%)、「難しかった」は生徒10.6%（全国5.3%）であった。中学校国語Bは、「簡単だった」は生徒9.1%(全国12.7%)、「どちらかといえば、難しかった」は生徒38.9%(全国36.8%)、「難しかった」は生徒21.1%(全国16.0%)であった。

ここでも、「簡単だった」とする沖縄児童は全国と比べて19.0～23.0%少なく、沖縄生徒は28.3%～37.6%少ない。逆に、「難しかった」とする沖縄児童は1.2～1.5倍多く、沖縄生徒は1.3～2.0倍多い。これも、全国と比べての得点の低さを裏づけているといえる。

②算数・数学

算数について、「『算数Ｂ－３－（２)』の問題に答えるとき、あなたはどのように考えたか」は、「漁業にたずさわる人の数」を棒グラフで示し、棒グラフから漁業にたずさわる人の全体の数の変化を読み取る問題だが、「問題の意味は分かったが、変化の様子が分からなかった」は児童4.5%(全国3.0%)であり、「問題の意味が分からなかった」は児童3.8%(全国2.2%)であった。全国と比べて、1.5倍以上多い。

また、「『算数Ｂ－４－２』の問題は簡単だったか、難しかったか」は、「5個のケーキを買うとき、与えられた条件から残り2個のケーキの買い方を答える」問題であり、「どちらかといえば、難しかった」は34.9%（全国28.2%)、「難しかった」は21.3%（全国15.7%）であった。明らかに、このような問題の解答に困難を感じていることが読み取れる。「「『算数Ｂ－４－２』の問題を自分で解いたときに、残り2個のケーキの値段の合計550円を求めましたか」については、「覚えていない」は19.2%(全国16.2%)、「解いていない」は12.4%（全国7.4%）である。この問題の無解答率は、沖縄児童14.8%(全国8.4%)であり、数字が少なくなっていることに注意したい。また、「『算数Ｂ－４－２』の問題のような順序よく考える問題を解いたことがあるか」については、「あまりない」と「全くない」を合わせると、児童38.2%(全国31.1%)と大きな差が出ている。

「解答時間は十分だったか」については、算数Aは「やや足りなかった」は児童12.7%（全国7.7%）、「全く足りなかった」は児童4.1%（全国2.2%）であり、算数Bは「やや足りなかった」は32.7%(全国24.2%)、「全く足りなかった」は児童15.6%（全国8.0%）である。「やや足りなかった」は全国の1.4～1.7倍多い。「全く足りなかった」は全国の1.9～2.0倍多い。数学Aは「やや足りなかった」は生徒15.1%（全国11.0%）、「全く足りなかった」は生徒3.7%(全国2.1%)である。数学Bは「やや足りなかった」は生徒21.9%(全国17.1%)、「全く足りなかった」は9.0%（全国4.4%）である。「やや足りなかった」は全国の1.3～1.4倍、「全く足りなかった」は全国の1.8～2.0倍多い。全国と比べての得点の低さを裏づけているといえる。

「調査問題は簡単だったか」については、算数Aは「どちらかといえば、難しかった」は児童17.2%(全国13.6%)、「難しかった」は児童8.8%(全国6.3%)であり、算数Bは「どちらかといえば、難しかった」は児童35.3%(全国33.2%)、「難しかった」は児童32.6%（全国24.3%）である。数学Aは「どちらかといえば、難しかった」は生徒30.2%(全国18.9%)、「難しかった」は生徒20.3%(全国9.1%)であり、数学Bは「どちらかといえば、難しかった」は生徒33.7%（全国36.4%）、「難しかった」は生徒47.6%(全国34.5%)である。これも、全国と比べての得点の低さを裏づけているといえる。

無解答率だけでは判断できないが、無解答者は難しいと思ったと判断して差し支えないだろう。無解答率は、算数Aは児童1.8%（全国1.1%）、算数Bは児童11.1%（全国5.9%）、数学Aは生徒8.0%（全国4.1%）、数学Bは生徒22.4%(全国14.4%)であり、全国と比べると算数Aは1.6倍、算数Bは1.9倍、数学Aは2.0倍、算数Bは1.6倍多い。これと照合してみても、沖縄県の児童・生徒は難易度について全体的に過小評価している、あるいは甘く評価しているように思われる。

注

（1）「琉球新報」2007年10月25日付。

（2）2007年12月8日、那覇市立与儀小学校体育館を会場にして、沖教組那覇支部・沖教組教育研究所・沖縄子ども研究会・沖縄県民間教育研究団体連絡会の共催で、中島哲彦（名古屋大学）の講演を中心に、和泉康彦（那覇市立石嶺小学校）、井樋口美香子（保護者代表）、加藤彰彦(沖縄大学)、中島哲彦(名古屋大学)をパネラーにしてシンポジウムが開催された。

（3）「琉球新報」紙は「学び再考――全国学力テストの波紋――」を2007年10月25日～11月3日まで7回連載し、「沖縄タイムス」紙は「問われる学力――全国学力テストの波紋――」を3回連載している。また、「学力を考える――識者に聞く――」を11月27日～12月11日まで3回連載している。さらに2008年に入って、「沖縄タイムス」紙は、2008年1月1日付から、「学力ってなに」を連載している。

（4）難波博孝「調査結果の分析と解説・教科別編――小学校国語、中学校国語」、『教職課程』2008年1月号、12ページ。

（5）同上、13ページ。

（6）同上、15ページ。

（7）尾木直樹「全国一斉学力テスト――学力をつけるためなのか――」、藤田英典編『誰のための「教育再生」なのか』岩波新書、2007年11月、47~48ページ。久冨善之は、質問紙は「『学校の〈よい子〉はこう答えるのが正しい』という作成者側の意図が強く伝わる形に作られている」とし、「そこに示された比率や数値は、むしろ『期待』への反応程度で偏りが生まれ、それぞれの実態を映し出すことがとてもできない」と述べている(久冨善之「07年全国いっせい学力テストの結果を読む」、『作文と教育』2008年2月号、11～12ページ)。これと関連して、久冨善之「何のための並行・質問紙調査なのか――『児童・生徒質問紙』『学校質問紙』

批判――」、『教育』2008年2月号を参照。

（8）沖縄県内小学生を対象に行った食事や睡眠などの生活習慣調査(目白大学)の結果によると、「毎朝、朝食を食べる」の項目で、1・2年生は7割を超えるが、学年が上がるにつれて減少し、6年では約5割となっている。この調査は、2006年に沖縄県内の子ども会に所属する小学生953人の親が回答したものである。抽出調査であり、子どもではなく親に聞いたという点が異なるが、一定程度の妥当性を持つと考えられる。（「沖縄タイムス」2007年12月8日付。）